



The Twentieth-Second Regular Report

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所
Cultural Heritage Protection Cooperation Office, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

カンボジア



サンボー・プレイ・クック遺跡保存事業の進捗状況

ビタロン・チャン 文化芸術省 サンボー・プレイ・クック機構 考古遺跡保存部 部長

中国



国家および省による優先保護遺跡」が多数集中している第1群51伝統的村落の保存活用事業全般の評価報告

ビー・ウィー 北京国文琰文化遺産保護中心有限公司 事業リーダー

インドネシア



サワルトのオンピリン炭鉱遺産：ユネスコ世界遺産としての保存状態を維持するための課題と政府の取り組み

プリタ・ウィカンティヤスニン インドネシア教育文化省 世界遺産推薦課 課長

ソロモン諸島



ソロモン諸島西部州シンボ島の新発見の考古遺跡4件と初めての放射性炭素年代測定

グリンタ・アレケ 文化観光省 ソロモン諸島国立博物館 考古学調査員

トンガ



トンガ国立博物館の再生：トンガ王国における文化遺産保護の試み

ミリカ・ポマナ 文化観光省 プログラム上級担当官補佐

ウズベキスタン



新発見：ダルヴェルジン・テパ遺跡のヒッポカンポス像のある石盤

アクマル・ウルマソフ ウズベキスタン科学アカデミー 芸術学研究所 主任専門研究員

ベトナム




バム寺院の門の修復工事

トラン・タイン・ホワン・ブック

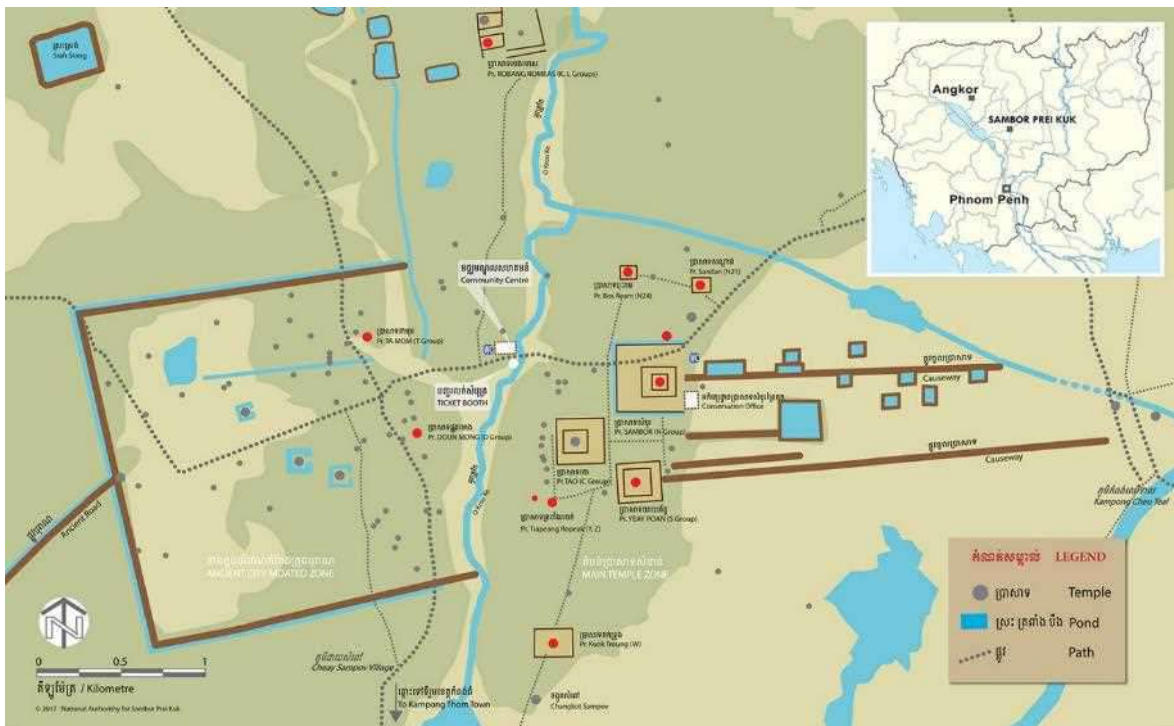
文化遺産保護管理ホイアンセンター 遺物管理部 修復建築士

カンボジア王国

	サンボー・プレイ・クック遺跡保存事業の進捗状況
	ビタロン・チャン 部長 文化芸術省 サンボー・プレイ・クック機構 考古遺跡保存部

1. はじめに

本報告は、サンボー・プレイ・クック遺跡に関する4回目（2013年12号、2014年13号、2018年20号参照）の報告となるので、今回は遺跡の歴史や一般的な遺跡紹介は繰り返しません。以前の報告では、サンボー・プレイ・クック機構（NASPK）の管理下で採用された新しい方法および2017年の世界遺産登録後の状況について紹介しました。



サンボー・プレイ・クック遺跡の地図：● 修復中の遺跡群や仏塔

2. 保存事業の進捗状況

本報告では、サンボー・プレイ・クック機構考古遺跡保存部によって実施された、新段階に入った保存事業の進捗状況について報告します。以下に4件の主要な活動について取り上げます。

2-1. 緊急保存

「プラサット・イエイ・ポアンの八角祠堂の緊急保存」：前回の報告の通り、この活動は、八角祠堂と美術装飾部を保存するために、効率的かつ効果的に現在進行しています。このような状態から当部局では、さらなる保護・保存・修復のために、遺跡内の他の記念建造物でもより幅広い活動を進めています。当事業は以下のような寺院でも部分的な保存を実施しています。

- 2018年：プラサット・イエイ・ポアン(S7・S8・S9・S10・壁)、プラサット・トラピーアン・ロピーク(Z1・Z2)、プラサット・スレイ・クラブ・リーク(L5)、プラサット・ドウオン・モン(D)
- 2019年：プラサット・トラピーアン・ロピーク(Y)、プラサット・クォーク・トロン(W)、プラサット・タ・モン(T)、アスラム・モハルセイ(N17)、N19塔とプラサット・サンダン

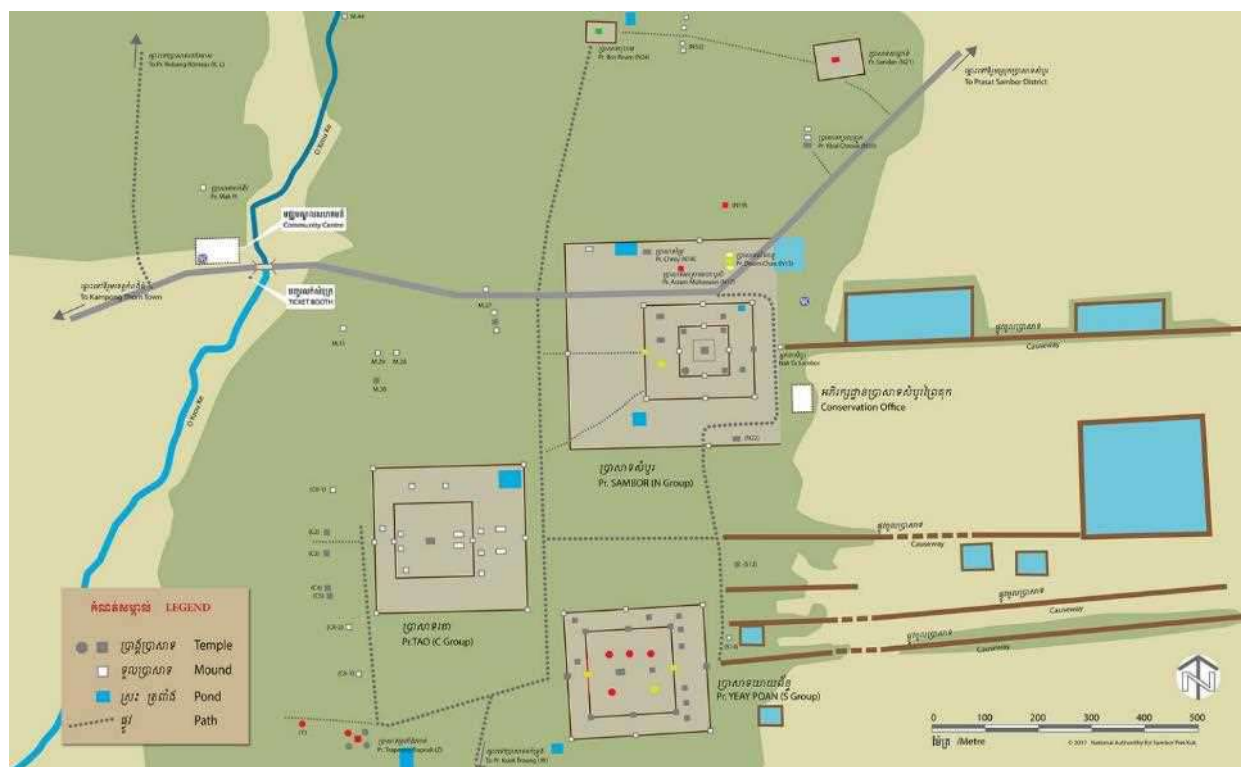
最新のリスク検査に基づいた緊急保存活動では、煉瓦による部分修復などの修理介入をすることになるかもしれません。しかし、ワイヤーによる結束、木材で支柱を建て、筋交いで支えることは今も行われています。

2-2. 修復工事

本稿では、5件のうち3件の修復事業について報告します。

A. S11塔

前回の報告でも述べましたが、S11塔は、八角形の祠堂で、2018年に修復工事を行いました(2018年20号 pp.9-10 参照)。2006年に、サンボー・プレイ・クック機構は、亀裂の入った壁を仮設のワイヤーケーブルで補強しました。文化芸術省は壁構造を検査し、2011年に屋根を被覆して構造を強化する事を決定しました。様々な劣化過程にあり経験上危険であると確認された構成材には、他の塔で実施している緊急保存工事を採用し、将来の保存条件の基礎として用いられることになりました。新たに危険な部材が見つかる度に、優先的に各塔の修復事業計画に組み入れられました。現代の危機分析の知見に基づく修復工事では、ワイヤーによる結束、木材支柱や筋交いで支える工事などを行います。それは、寺院を長持ちさせるための暫定措置の第一歩です。技術チームは、データ調査と危険地図作成の前に、各寺院の危険度を評価しました。



サンボー・プレイ・クック遺跡の主要寺院群：● 緊急保存工事 ● 修復工事 ● 不法発掘抗の埋戻し



実例：部分的緊急保存工事、修復前と修復後

B. プラサット・イエイ・ポアンの西門と東門の内部

「アクセス不能から保存へ」が本事業の基本理念です。建物自体を保存するだけでなく、建物へのアクセスを可能とします。それは、歴史的建造物の本来の機能を取り戻すもう一つの方法となります。

-**西門 (S5)**：西門の主なリスクは不安定な構造壁と扉です。壁には樹木の根が侵入していました。混乱期に行われた略奪と戦争のせいで、出入口は近づきがたくなっていました。建物が不安定なので、壁の南側への代替迂回路が作られていて、それが壁に損傷を与えていました。

-**東門 (S3)**：この事業は現在進行中です。寺院に樹木や根が侵入して、ここを訪れる観光客には魅力的な光景となっていました。そのような状態は寺院の保存とは相容れないものです。寺院にかかる負荷は大きくなり、根が成長し煉瓦造りの構造部に静かに侵入しています。高さ4 mもの煉瓦と土の堆積物が建物全体を覆い、近づくためには低い北壁への迂回路が必要です。修復事業では、建物の保存のために煉瓦と土の堆積を取り除き、木の枝を切りました。建物の不安定さの主な原因となっている圧力負荷と震動を軽減するためです。

C. プラサット・スレイ・クラブ・リーク：L5、L6、L7

保存活動を北部地域にまで拡大するために、プラサット・スレイ・クラブ・リーク（L5・L6・L7）の保存事業が計画されました。建築様式がプレ・アンコール時代そしてアンコール時代とどのような関連があったのかを知る上で、ここは研究者にとって大変素晴らしい場所なのです。本事業は2019年末に予定されており、新たな観光経路の準備も行われます。

2-3. 不法発掘抗の埋戻し

1970年代から1990年代半ばまでの国内混乱期に、サンボー・プレイ・クックでは不法発掘が横行しました。1990年代半ばに、文化芸術省は脆弱な建物の倒壊を防ぐために、そのほとんどが塔の内部でしたが、破壊された堆積土台部の埋戻しを開始しました。しかし、この工事は3件の主要な建造物群（プラサット・イエイ・ポアン〔S〕、プラサット・サンボー〔N〕、プラサット・タオ〔C〕）だけで実施されました。2004年から2005年にかけて、サンボー・プレイ・クック修復事業では、最初の段階から失われた土台の補強工事や台座の再配置なども継続して行いました。埋戻し工事は周辺の建造物群では行われず、プラサット・ボス・リアム（N24）で再度始められました。

この事業では建造物を安定させるだけでなく、土台部の縦断面図から古代建築技法や資材についてより総合的な知見を提供してくれます。また3件の主要建造物群だけではなく、遺跡全体の観光ルートの向上の一部ともなります。事業はその他の周辺建造物群の価値をも高めることになるでしょう。



実例：Z1塔の部分的緊急保存工事、修復前（左）修復中（中央）修復後（右）



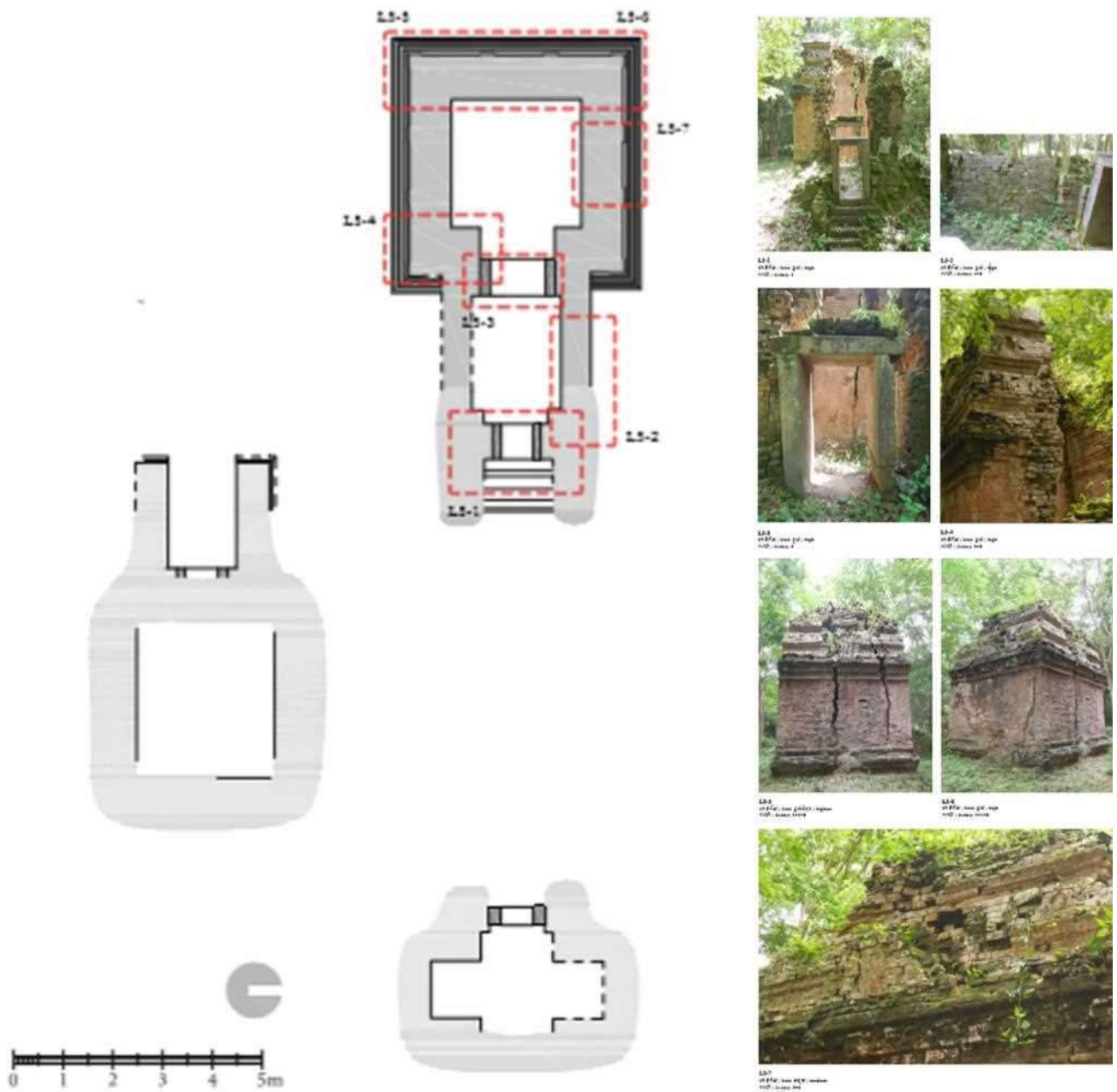
S1 塔の修復前と修復後



S5 門の修復前と修復後



S3 門の修復前と修復中



プラサット・スレイ・クラップ・リークの危険度分布図 (NASPK2017)



N24 塔：正面からみた盗掘による堆積土壌の山と土台部（左）、不法発掘坑の内部（右）

2-4. 研修プログラム

王立芸術大学の6名の学生が選ばれて、サンボー・プレイ・クック遺跡修復事業に参加しました。これは、次世代の若者に考古学調査と建造物修復を経験させるための当局の実験プロジェクトです。学生が実地の経験を積むだけでなく、サンボー・プレイ・クック機構の様々な部局に所属する専門家と共に保存修復活動を実地体験するよい機会でもあります。そして、修復工事の継続に必要な熟練した人材を養成することにもつながるでしょう。この研修プログラムは、サンボー・プレイ・クック機構のプレ・アンコール期研究における長期計画の一環として計画されました。



王立芸術大学の学生のための研修の様子

3. おわりに

上述のとおり、現在進行中の修復工事は文化財建造物の保全だけではなく、大学生への新たな教育支援プログラムともなっています。現場における実地体験の機会を学生に提供し、次世代の考古学研究者や修復保存専門家を育てるのです。さらに、文化財建造物（真正性・完全性・価値）を損なうことのない観光ルート経路について、保存の新しい考え方も示してくれます。

注記：本報告は、サンボー・プレイ・クック機構 考古遺跡修復部による修復工事の一部分についてです。文中の写真のほとんどは、事業チームが修復作業中に撮影しました。

中国



「国家および省による優先保存遺跡」が多数集中している第1群 51 伝統的村落の保存活用事業全般の評価報告

ビー・ウィー 事業リーダー

北京国文琰文化遺産保護中心有限公司

1. 事業の背景

伝統的村落は、中国の優れた伝統文化の礎でありその核心であるだけでなく、現代文化と時代精神の重要な担い手でもあります。中国共産党第18回国会議以来、党と政府は伝統的村落の保存と継承を非常に重要視してきました。国家文物局、住宅・都市農村省、およびその他7つの部局は、合計6,803件の伝統的村落を5群に分類しました。



「国家および省による優先保存遺跡」が多数集中している第1群 51 伝統的村落の分布図

2014年、国家文物局は、伝統的村落の保存と活用を進めるために、「国家および省による優先保存遺跡」が多数集中している伝統的村落の総合的保存活用事業に着手しました。270の村落からなる3つの群を対象にした保存活用事業が次々と実施され、事業内容は村の文化財修理、環境保全と修復、展示活用、防火対策、文化遺産の安全保存と落雷防止など多岐にわたりました。約5年以上にわたって堅実な歩みを

進め、「国家および省による優先保存遺跡」が多数集中している第1群51伝統的村落における総合的保存活用事業の当初の目的を達成しました。

2018年当有限公司は、国家文物局の委託を受けて、この51伝統的村落の保存活用についての包括的調査と評価をおこなう研究チームを編成しました。評価によって、当社は第1群51伝統的村落の正確な現状と事業実施における問題点などを基本的に把握し、分析と調査に基づいた目標戦略と提言を提出しました。その目的は、作業のフォローアップに役立つ参考資料を提供することです。紙面の都合上、本報告はおもに保存活用事業の総合的状況の簡単な紹介にとどめます。



湖南省石堰坪村西部の土家村



黄海沿岸の海藻の家：山東省東楮島村



「赤い」古代都市：湖北省五里村

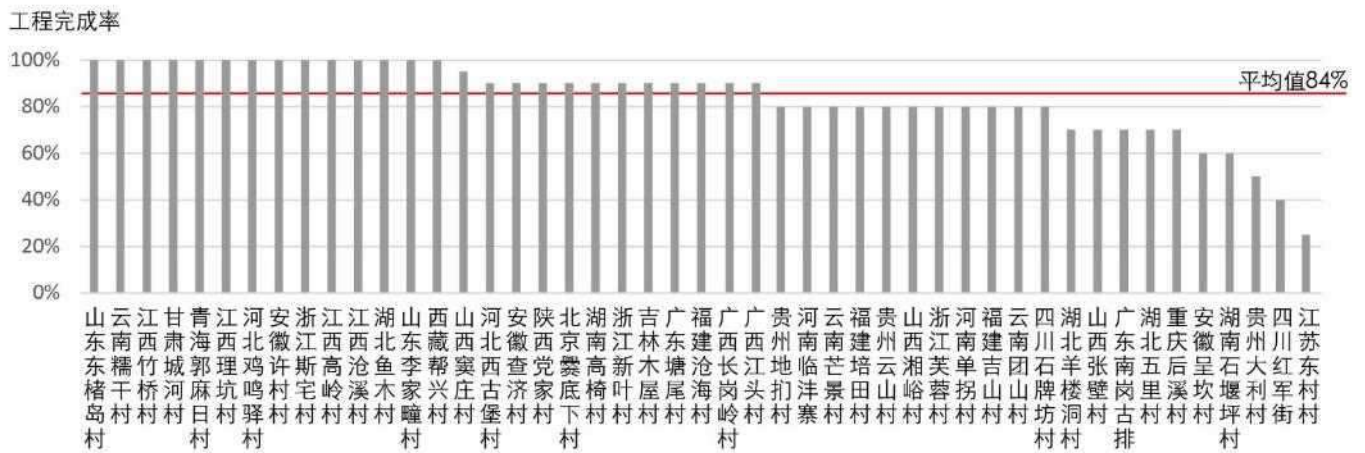


東部四川省石牌坊村の領主の邸宅

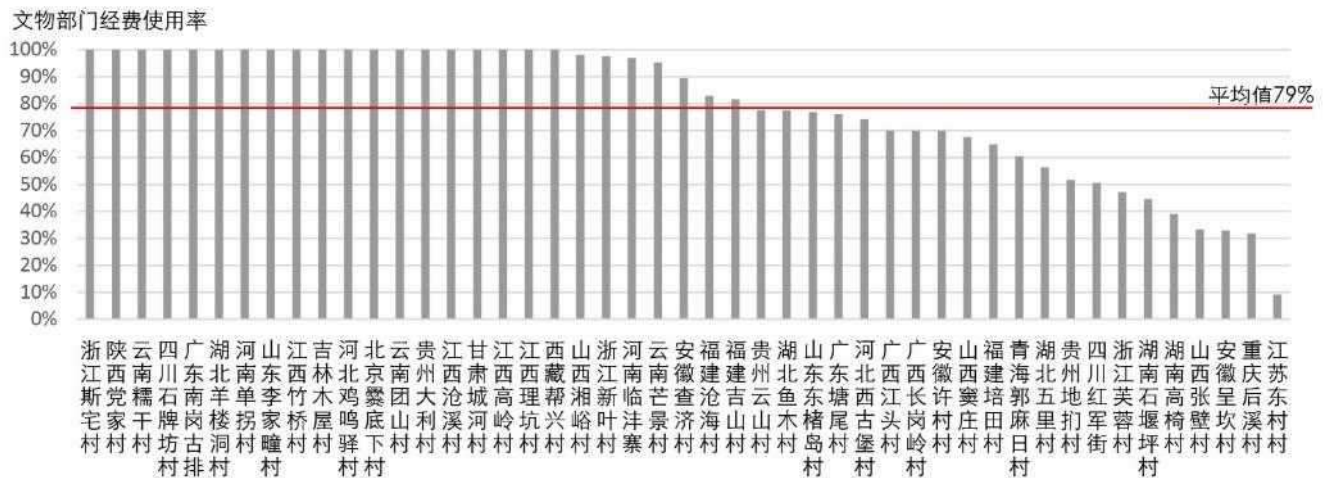
2. 評価の概要

1) 評価の対象

「国家および省による優先保存遺跡」が多数集中している第1群 51 伝統的村落は、24 の省や直轄市および自治区と 40 の県や区に広範囲に散在しており、豊かで多様なテーマが多くあります。そして国内のもっとも代表的な素晴らしい地方遺産があります。



各村落事業の完成率統計表



各村落の特別中央資金使用率統計表

2) 評価の内容

今回の評価は、現行の事業評価法に準拠して、事業の実施効果と総合的利益を包括的に評価することに焦点をあてました。特に留意したのは、地域の文化および経済的發展を推進し、貧困緩和を促進し、生活水準を向上させ、地域住民が自尊心を取り戻すなどが、この事業の実際的な役割でした。それと同時に、管理組織の形態と活動および活用の方法の観点から、実施効果に影響する様々な要因の分析にも注意しなければなりません。そして、現行の未解決課題と限界を整理し、地域住民の経験や実践をまとめ、優れた模範となる事例を選択しました。

3. 事業の完了と総体的効果

1) 事業の進行と資金の使用

評価結果によれば、第1群51伝統的村落における全保存活用事業は高い完了率で実施されました。各村落の事業完了率は平均84%で、国家文物局からの特別中央基金の平均利用率は約79%でした(2018年7月現在)。データを調べると、基金の利用は基本的に事業の進行と一致していることがわかります。つまり、作業が効率よく進行したので、目標は期待通り達成され、注目に値する成果をあげました。

2) 事業実施の全体的効果

国家文物局のすべての部局は、その専門性を最大限に発揮して、地方自治体と積極的に協力し、ほぼ5年にわたって困難な事業に取り組みました。そして、第1群51伝統的村落の保存状況は大幅に改善されました。4件の事業の包括的評価を実施した結果、優れたもしくはより良い村が全体の70%以上を占めているとの結論に達しました。その内、優れているかより良いと分類される文化遺産修復事業は76%で、環境修復事業は61%、展示および活用事業は64%、防火事業は62%となりました。



陝西省党家村の修復前（左）と修復後（右）



地震で被災した僧院の修復前（左）と修復後（右）：西藏帮興村



環境と調和した防火設備：貴州省登岑村



伝統的薪小屋の修復：浙江省斯宅村

村の文化遺産であるほとんどの建物の保存状態と安全性が大幅に改善されました。同時に、建築工学の実践に関しては、さまざまな地域で、保存概念・技術的手法・工学技術者組織などについて、一連の有益な調査研究が行われてきました。たとえば、陝西省の党家村では、工学技術ガイダンスを提供する専門家が長期に滞在し、各建物の保存および使用要件に応じて、最小限の修復介入の原則と住宅機能の改善との間に完璧な調和をとっています。チベットの帮興村の寺院の改修では、設計と建設に地元の技術者が採用され、これにより古来の技術とオリジナルの建築スタイルの再現をより確実なものとししました。浙江省の斯宅村では、伝統的な「独立した薪小屋」が復元され、防火設備を備えるように改良されました。これにより、特殊な場所の制約がありながら、文化遺産の防火問題が経済的かつ効率的に解決されました。

この事業を通じて、村の歴史環境が保存され、地域の特徴がさらに際立ち、環境の質が改善されました。たとえば、雲南省の芒景村と团山村は、主要な問題を見つけ、元の環境を再創造するという考えに従ってマイクロ変革を実行し、伝統的環境を「変更しないで最適化する」という優れた成果をあげています。



雲南省芒景村



雲南省团山村



展示を鑑賞する村人：雲南省芒景村



武道の演武に使用される古代劇場：福建省培田村



村落の保存活用事業は、観光産業の開発振興にも効果があり、住民の収入は増加しました。事業の実施に伴い、近年すべての村の観光収入は増加しました。多年度の所得統計によると、34の村で観光収入の増加率は平均37.3%に達しました。貴州省地扞村・雲南省糯干村・四川省紅軍街・湖北省魚木坪村・雲南省芒景村などかつて貧困地域と格付けされていた地区で、一人当たりの所得は国内平均レベルよりもかなり高額になりました。糯干村と魚木坪村の一人当たり収入は、その地域の平均収入の2倍となり、芒景村ではほぼ3倍となりました。

地域経済の開発推進に加えて、この修復活用事業全体は地域の伝統文化継承を推し進め、地域の文化遺産保護を発展させるという積極的な役割も果たしました。一方、本事業は、村の文化活動や歴史展示のためにより多くの場を提供し、文化遺産以外の村の活動や伝統的民俗活動を促進し、村民の帰属意識と地域の伝統文化への誇りを強固なものにしました。たとえば、山東省の東楮島村・北京の爨底下村・雲南省の芒景村・山東省の李家疇村などでは、豊かな内容と質の高いレベルの展示品を備えた村の歴史博物館が設置され、地元住民に深く愛されています。福建省の培田村では、伝統的な公演を行うために文化遺産を活用し、特色あるワークショップや春の耕作祭を開催し、文化遺産関連以外の活動もあわせて実施したことなどが、村の民俗文化の発展を効果的に進めました。

村民、村委員会、政府メディアなどによって宣伝された湖南省の石堰坪村は、農業文化芸術祭で写真撮影会を企画し特別な映画の撮影などによって、村の桃園の美しい風景を一般に公開しています。湖南衛星放送春祭り祭典に2年連続で選定されたことも、村に良い宣伝効果をもたらしました。

一方、本事業の実施により、設計・施工分野において、地域遺産の保護に取り組む優秀な人材を育成し、伝統的な建築技術の継承のための研究を推進してきました。


伝統的村落の総合的な保存と活用は、複雑で組織的な事業であり、政府部門全体、村の委員会、およびあらゆる職業の人々の協力が必要です。この事業の進展を通じて、さまざまな地域が協力的管理構造の最適化・管理能力の構築・非国家所有の財産である文化遺産の保存と活用の方法の研究・コミュニティと社

会的活動の参加などの分野において多くの経験を蓄積してきました。51 の伝統的村落が位置する市や郡では、大多数がこの作業のために特別な指導者集団・管理委員会・その他の調整機関を設置し、定期的な合同会議を開催しており、全体の作業計画促進に重要な役割を果たしてきました。管理能力の養成に関して、国家文物局は迅速に「国および省による優先保存遺跡が多数集中している伝統的村落の固有建築の保存活用に関するガイドライン」（暫定版）を発行し、国全体で2つの研修コースを組織しました。地方自治体も関連部門の職員を増員し、広西省・湖南省・雲南省・福建省・浙江省・貴州省やその他の省でも村単位の専門家システムを導入しました。事業を実施するための技術的保証は、強固なものとなりました。他の多くの地域でも、現実に根ざした驚くべき革新的な試みを行っており、農村遺産の保存と管理を推し進め、農村社会問題の解決においてさえ重要な役割を果たしてきました。

4. まとめ

中国における伝統的村落は、第一級の歴史および文化資産であり、その地域特有の生態および人間環境と産業開発のための最も基本的な条件を保有しています。伝統的村落の保存活用は、地域活性化戦略において積極的かつ主導的な役割を果たすこととなります。近年、中国は、国内の伝統的な地域文化の保存継承と両立する持続可能な開発の方法を見つけるために懸命に取り組んでいます。「国家および州の優先保存遺跡」が多数集中している51の伝統的村落からなる第1群の包括的保存活用事業が、この方針に沿って堅実な一步を踏み出したことが今回の評価により明らかになりました。村に変化をもたらす5年間の取り組みが行われたことは、伝統的な村落を保存活用し、時代の提示する機会の中で人間と自然が調和のとれた緩やかな発展をし、「山を眺め、水を眺め、郷愁に生きることを忘れない」明るい未来を作る方法への期待を高めました。

インドネシア

	<p>サワルトのオンビリン炭鉱遺産：ユネスコ世界遺産としての保存状態を維持するための課題と政府の取り組み</p>
	<p>プリタ・ウィカンティヤスニン 課長 インドネシア教育文化省 世界遺産推薦課</p>

はじめに/背景



サワルトのオンビリン炭鉱遺産の地図（著作権：サワルト市立歴史遺物博物館文化事務所）

サワルトのオンビリン炭鉱遺産は、炭鉱遺産と石炭統合輸送システム（炭鉱からシンカラク湖に沿ってエマへブン港の石炭貯蔵施設まで続く鉄道輸送網）から構成されています。数件の文化財と文化遺産から構成され、世界の歴史と密接に関わっています。現在ユネスコ文化遺産に登録されているオンビリン炭鉱遺産は、インドネシアの西スマトラ州に位置し、オランダ植民地時代の19世紀末から20世紀初期に建造されました。

エネルギー資源の支配競争が激化し、オランダ政府もエネルギー資源を探して自国の植民地を調査しました。そして、西スマトラ州サワルトにあるオンビリン盆地に高品質の石炭鉱床を発見し、この地域の採掘に投資しました。採掘は1891年に始まり、その後インドネシアの独立まで、オンビリン炭鉱の

所有権と管理は、オランダ政府から日本軍部そしてインドネシア政府へと何度か変わりました。

採掘が採算に合わないと公表されるまで、オンピリン炭鉱の採掘と経営は続けられ、2002年に採掘が中止となりました。サワルト市民の約40%は炭鉱労働者で、彼らが町を離れると、サワルト市は徐々に廃れました。2001年に当時市長を務めていたアムラン・ノアー氏がこの状況を何とかしようと、サワルト市の再生と発展のための第一歩として「文化観光炭鉱都市スワルト」の構想を立ち上げ、公表しました。

一方、地域の再生・発展のための開発計画は、スワルトの人々に希望をもたらしました。しかし、開発は破壊につながると考える保護主義者からは、都市開発によって町の様相が変わり遺産保護に悪影響を与えるのではとの懸念の声も上がりました。

サワルトのオンピリン炭鉱遺産をユネスコ世界遺産に推薦することは、町の保護に役立つと期待されています。さらに、遺跡を訪れる観光客が増えると、町の再生や地域社会の繁栄につながり、住民の生活水準の向上にもなることでしょう。

サワルト地域のオンピリン炭鉱遺産にある保存資産

サワルト地域にあるオンピリン炭鉱遺産を構成するのは、3地域（A・B・C）にある12の資産です。場所はインドネシア、西スマトラ州。正確に言えばサワルト市、ソロック市、ソロック県、パダン・パンジャン市、タナ・ダタール県、パダン・パリアマン県、パダン市などです。3地域合計で268.18ヘクタールあり、緩衝地域を含めると7356.92ヘクタールになります。

地域A：サワルト炭鉱遺跡と炭鉱会社都市を構成する6つの資産

- A1: ソエンガイ・ドリアン炭鉱（ドリアン炭坑区域、パダン・パンジャン炭坑区域、ソエンガイ・ドリアン炭坑区域、ロエント炭坑区域、坑道）
- A2: 鉱山学校
- A3: 石炭加工場区域
- A4: オンピリン鉄道輸送網（サワルト駅、クバン・シラクーク発電所、カラムトンネル、ムアロ・カラバン駅）
- A5: 企業都市（鉱山管理区域、作業員宿舎区域、医療施設、市場、支援施設）
- A6: サラク発電所とランティ送水ポンプ場（サラク発電所区域とランティ送水ポンプ場区域）

地域B：鉄道施設と構造物を構成する5つの資産

- B1: 鉄道網(鉄道駅)
- B2: バツ・タバル駅
- B3: パダン・パンジャン駅
- B4: ティンギ鉄橋
- B5: カユ・タナン駅

地域 C：エマヘブン港の石炭貯蔵施設を構成する 1 つの資産

- C1: 石炭貯蔵庫

[添付資料：全種類の重要物件一覧表参照]

保存の取り組み

サワルントのオンビリン炭鉱遺産をユネスコ世界遺産に推薦することは、当該遺産の保存だけでなく地域開発および地域社会に繁栄と生活水準改善をもたらす可能性があります。言い換えれば、炭坑遺産を保護するだけでなく、地域社会の繁栄と生活水準の改善のために、持続可能な開発をするべきなのです。

しかし、サワルントのオンビリン炭鉱遺産地域は、保存に関して様々な課題を抱えています。不法採掘による潜在的景観劣化、および遺産建造物と周辺地域への人々の無関心などがあげられます。一例をあげると、不法採掘による将来的な景観の劣化です。この問題を解決するために、ブキット・アサム社は鉱業会社ではありますが、オンビリン炭鉱遺産をユネスコ世界遺産として支援することを確約しました。そして炭坑遺産全地域を保護するために炭鉱地区の採掘権契約を延長し、関連省庁が他の鉱業会社に新たな採鉱を認可できないようにしました。ブキット・アサム社は、サワルントの持続可能な発展のために、鉱山学校の経営を続けおり、現在も教育目的のための小規模な採鉱作業は続いています。

もう一つの課題は、放棄された遺産建造物群です。建造物とその周辺地域を維持管理する必要があり、地方政府は中央政府と協力して、地域技術実行課が地方および国レベルの文化財の登録を行います。これによって、中央政府は保存を行う公的な法的根拠をもつこととなります。政府は登録だけでなく、登録文化財および文化遺産について、してよいことといけないこと、規則、勧告などを広く地域住民に知らせます。そうすれば、地域の人々は文化遺産の保護活動に参加でき、簡単な清掃や見守りを行い、建造物を破壊しないように努めることでしょう。

おわりに

サワルントのオンビリン炭鉱遺産をユネスコ世界遺産登録に推薦することは、現在の保存状況を維持し確実に未来へとつなげるための政府の試みのひとつです。不法採掘による将来的な景観劣化および放棄された遺産建造物群への無関心など、サワルントのオンビリン炭鉱遺産における課題は、関連機関が協力して管理し協調すれば解決すると期待されています。

参考文献

「サワルントのオンビリン炭鉱遺産」2018 年。世界遺産一覧表登録のための推薦書。ジャカルタ、インドネシア教育文化省、西スマトラ州政府。

「ICOMOS への回答文」2018 年。サワルントのオンビリン炭鉱遺産推薦担当課が作成。推薦担当課は提出済みの推薦書の内容を明確にして、議論を深めるための追加情報を提出。追加情報の提出は、ICOMOS (2018 年 10 月 1 日の書類番号 GB/AA/1610/Add_Info_I) の勧告による。ジャカルタ。

「サワルントのオンビリルン炭鉱遺産」2019年。回答と追加情報。ICOMOS 世界遺産諮問部の勧告（書類番号 GB/AA/1610/IR）への回答として、インドネシア共和国教育文化省が作成。外務省、運輸省、国営企業省、西スマトラ州教育文化局、サワルント市文化遺物博物館局、バキット・アサム社オンビリルン炭鉱、インドネシア鉄道社(ジャカルタ)などが協力した。

添付資料

1. 全種類の重要構成資産一覧表
2. サワルントのオンビリルン炭鉱遺産の地図
3. サワルントのオンビリルン炭鉱遺産の写真

重要構成資産全種類の一覧

ID 番号	種類	重要物件
A1: ソエンガイ・ドリアン炭鉱		
A1.1	ドリアン炭坑区域	ドリアン炭坑
		換気装置
		圧縮機建物
A1.2	パンジャン炭坑区域	パンジャン炭坑
		パンジャン炭坑換気装置
A1.3	ソエンガイ炭坑区域	ソエンガイ炭坑
		ソエンガイ・ドリアン刑務所跡（刑務所の鎖）
A1.4	ロエント炭坑区域	ロエント I 炭坑
		ロエント II 炭坑
		ロエント III 炭坑
A1.5	坑道	坑道
A2: 鉱山学校		
	鉱山学校	鉱山学校
A3: 石炭加工場区域		
	石炭加工場	石炭加工場
A4: オンビリルン鉄道輸送網		
A4.1	スワルント駅	駅舎
		引込み線
		機関車転車台
A4.2	クバン・シラクーク発電所	駅舎
		引込み線
A4.3	カラムトンネル	カラムトンネル
A4.4	ムアロ・カラバン駅	駅舎
		引込み線
A5: 企業都市		
A5.1	鉱山管理区域	A5.1.a. オンビリルン炭鉱会社本社

		A5.1.b. 技術者宿舎 W-24
		A5.1.c. 技術者宿舎 W-28
		A5.1.d. 技術者宿舎 W-29
		A5.1.e. 技術者宿舎 W-30
		A5.1.f. 技術者宿舎 W-46
		A5.1.g. 技術者宿舎 W-14
		A5.1.h. 技術者宿舎 W-15
		A5.1.i. 技術者宿舎 W-16
A5.2	作業員宿舎区域	A5. 2. a.
		A5. 2.b.
		A5. 2.c. 給食施設建物群
A5.3	医療施設	A5. 3.a. 病院
		A5. 3.b. 医師住宅 W1
		A5. 3.c. 医師住宅 W2
		A5. 3.d. 医師住宅 W3
A5.4	市場(オールドマーケット)	A5. 4.a. 劇場
		A5. 4.b. ベクシンケック・ハウス
		A5. 4.c. オンスベラン組合
A5.5	支援施設	A5. 5.a. オンビリン運動場
		A5. 5.b. 集会場
		A5. 5.c. オンビリンホテル
		A5. 5.d. サンタバーバラ・カトリック教会
		A5. 5.e. サントルシア学校
		A5. 5.f. 官舎補佐の住宅
		A5. 5.g. 裁判所長の住宅
		A5. 5.h. 州検事の住宅
		A5. 5.i. 裁判所書記官の住宅
		A5. 5.j. 市職員の住宅 1
		A5. 5.k. 市職員の住宅 2
A6: サラク発電所とランティ送水ポンプ場		
A6.1	サラク発電所区域	サラク発電所集合体
		サラク官舎 W301
		サラク官舎 W302
		サラク官舎 W303
A6.2	送水ポンプ場区域	A6.2.a オンビリン川
		A6.2.b. ポンプ場建物
B1: 鉄道システム		
B1	鉄道システム	鉄道システム

B2: バツ・タバル駅		
B2	バツ・タバル駅	駅舎
B3: パダン・パンジャン駅		
B3	パダン・パンジャン駅	駅舎
		機関車倉庫
		送水ポンプ
		機関車転車台
B4: ティンギ鉄橋		
B4	ティンギ鉄橋	ティンギ鉄橋
B5: カユ・タナン駅		
	カユ・タナン駅	駅舎
C1: 石炭貯蔵庫		
C1	石炭貯蔵庫	石炭貯蔵庫
		エマヘブン埠頭



図1. ドリアン炭坑区域の重要設備のひとつである圧縮装置の建物 (A 地区)
(著作権: サワレント市立歴史遺物博物館文化事務所)



図2. サラク発電所区域のサラク発電所群 (A地区)
(著作権: プリタ・ウィカンティヤスニン)



図3. 作業員宿舎地域の給食施設建物群 (A地区)
現在は博物館として機能している。
(著作権: プリタ・ウィカンティヤスニン)




図4. ティンギ鉄橋 (B 地区)
(著作権：サワレント市立歴史遺物博物館文化事務所)



図5. エマヘブン港の石炭貯蔵庫の空中写真 (C 地区)
(著作権：サワレント市立歴史遺物博物館文化事務所)

ソロモン諸島

	ソロモン諸島西部州シンボ島の新発見の考古遺跡4件と初めての放射性炭素年代測定
	グリンタ・アレケ 考古学調査員 文化観光省 ソロモン諸島国立博物館

はじめに

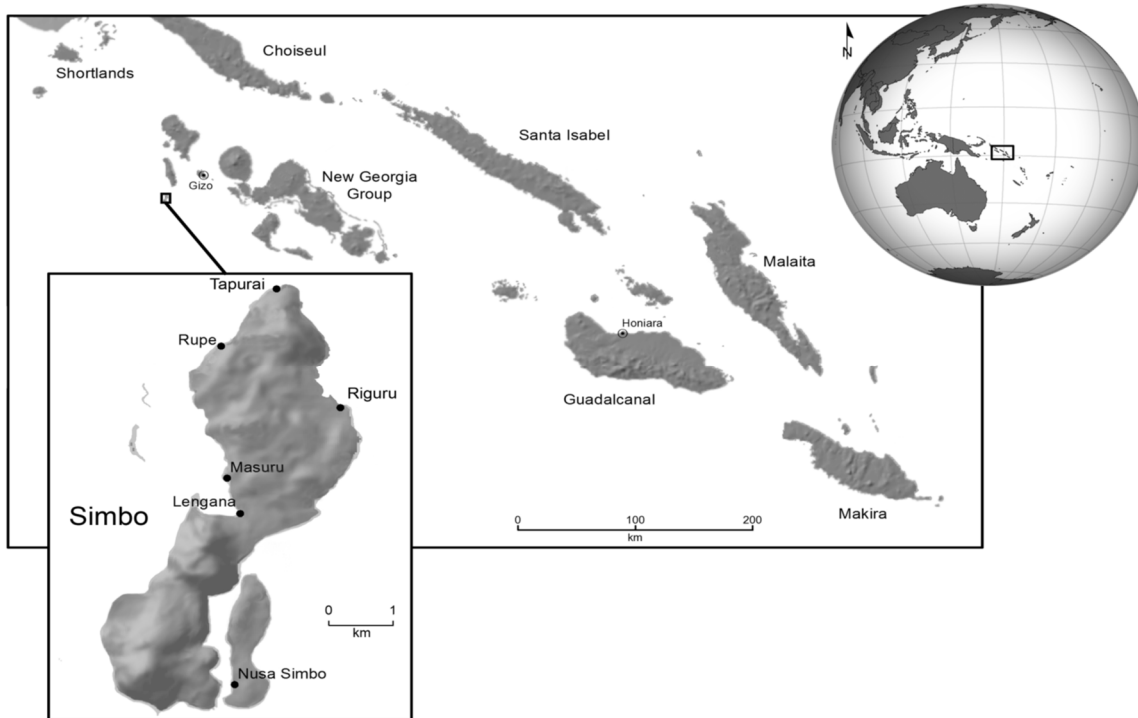


図1. ソロモン諸島西部州シンボ島の位置 (出典: Hass et al, 2018)

シンボ島は、ソロモン諸島西部州のニュージョージア諸島群に位置しています。図1に見るように、シンボ島は西部州の首都ギゾから海をへだてて 35km 離れています。シンボ島は地元ではマニデグスグスとも言われていますが、本島と少し小さいヌサシンボ島の 2 島からなっています。大きさはおよそ長さ 6.4km、最も幅の広いところでも 1.6km 以下しかなく、面積は約 12km²です。島の南部にはマティンディング山とパトゥキオ山の二つの火山があり、北部はほとんどが起伏のないなだらかな丘や尾根からなっています。海岸線は、サンゴ砂の入り江、サンゴ礁、潮間にできる砂州などからなり、多様に富み生産性の高い海洋エコシステムを支えています。シンボ島には5つの主要な村落と多数の小村落があり、人口は1800人程度、漁業と単純農業を生業としています (Haas et al 2018)。1922年、アーサー・モーリス・ホカルトが、シンボ島について詳細な民俗学的調査を実施しました。1978年と1980年、ダニエル・ミラーがソロモン諸島国立博物館と協力して国家遺跡考古学調査を行い、59件の遺跡を確認しました。歴史的資料と情報提供者との面談手法を用い、現在の占有地・宗教遺跡・首狩り場遺構・現在の居住村などを中心に調査を行いました (Haas et al, 2018)。

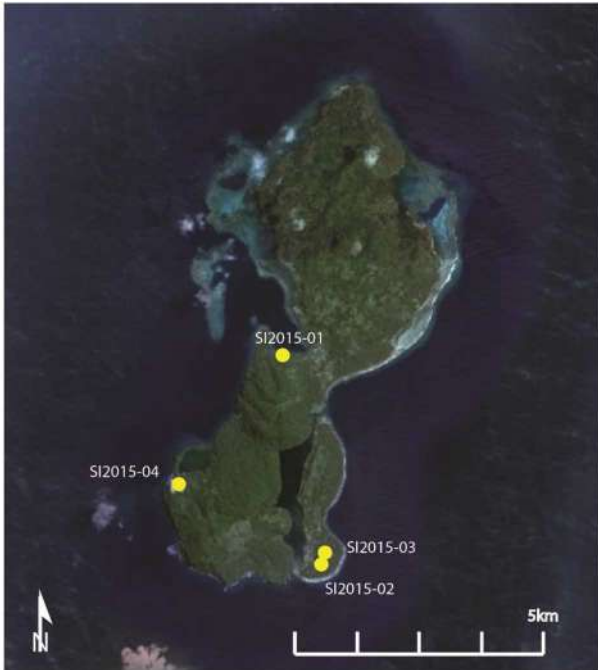


図2.シンボ島の衛星写真と確認済みの新発見考古遺跡のおおよその位置（出典：Hass et al, 2018）

2015年6月の予備調査では、洞窟、岩窟住居、海岸段丘、土器発見の場所などの調査と地元情報提供者との面談を実施しました。遺跡の確認にはミラー文献記録（1978・1980）を手引き書としました。この調査は、サンディエゴ州立大学、ソロモン諸島国立博物館考古学人類学局、シンボ島の土地所有者らの協力で実施されました。野外調査チームは、図2に示すように4件の考古遺跡を新たに確認し、シンボ島遺跡初めての放射性炭素年代測定をおこないました。

新発見考古遺跡4件と初めての放射性炭素年代測定

考古学野外調査の結果、歴史遺跡が1件、先史遺跡が3件新たに発見されました。歴史遺跡（SI2015-01）には、西欧人の作った交易所が含まれています。2件の先史遺跡（SI2015-02・SI2015-03）は小さい方のヌサシンボ島にある洞窟と岩窟住居です。4番目の先史遺跡（SI2015-04）は、オーヴ活火山の山頂に隣接する先祖を祭る聖堂などです。

1. SI2015-01：ヨーロッパ人の交易所（史跡）

図3から図7はヨーロッパ人の交易所跡（SI2015-01）の写真です。交易所跡や交易商のベースキャンプ跡から遺物が出土しました。アンドリュー・チェインが最初の交易所を設立した1844年から1900年代のはじめまで、ヨーロッパ人は断続的に島を占領していました（Jackson1987）。遺跡では、貯蔵庫の土台部、擁壁、錨の鎖などが見つかりました。コンクリート製の蹴上げのついた階段を上ると、かつての住居と思われる区域に続いて集水設備や3件のテラスがあり、ガラス瓶やクレイパイプの破片などの遺物が散らばっていました（Haas et.al, 2018）。



図3. ヨーロッパ人の交易所の貯蔵庫(SI2015-01)

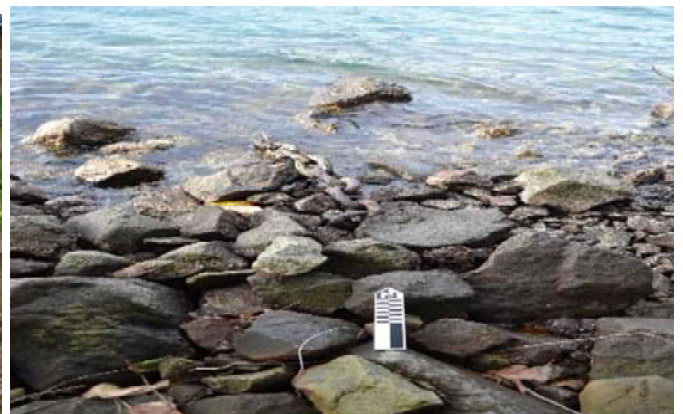


図4. 錨の鎖(SI2015-01)



図 5. 階段(SI2015-01)



図 6. 遺物(SI2015-01)



図 7. 集水設備(SI2015-01)

2. SI2015-02：洞窟（先史遺跡）

図 8 と図 9 は先史遺跡（SI2015-02）の貝塚を含む洞窟に関する写真です。岩窟住居には低密度の貝塚があり、そこには貝貨の破片や土器片なども含まれていました。遺跡表面部の貝殻の放射性炭素年代測定によると、居住時期は 1560 年～1820 年前（200 年～450 年）でした。小さなボーリング棒を 1 m の深さまで入れて調査しましたが、表面に堆積は認められませんでした。



図 8. 洞窟(SI2015-02)



図 9. 貝貨(SI2015-02)

3. SI2015-03：岩窟住居（先史遺跡）

図 10 と図 11 は先史遺跡の岩窟住居（SI2015-03）です。大きな洞窟で、高さ 2 m、長さ 4.6m、幅 2.3m の主室と前方に小さな部屋が 2 室ありました。主室では、土器破片が 5 件、貝塚、貝貨片、西欧製の陶器片などが見つかりました。北側の前室には考古遺物は何もないようでした。南側の前室には、小さな貝塚とカナリウム・ナッツの加工場所がありました。放射性炭素年代測定によると、1000 年から 1240 年前（770 年～1010 年）のようです（Haas et.al, 2018）。図 11 の石は先史時代にナリ・ナッツがどのように加工されていたかの証拠となります。シンボ島の住民は今でも同じ方法でナッツを加工しています。



図 10. 岩窟住居(SI2015-03)



図 11. ナリ・ナッツ加工場(SI2015-03)

4. SI2015-04：祖先を祭る聖所（先史遺跡）

図 12、13、14 は先史遺跡の先祖を祭る聖所（SI2015-04）に関するものです。聖所はオーヴ活火山の頂上近く、クレーターの上に位置し、シンボ島の西部海岸線を眺望できます。聖所では、貝殻の破片、パワーストーンらしきもの、43 件の土器片、頭蓋骨片などを発見しました。貝殻はシャコガイでした。放射性炭素年代測定によると、560 年から 700 年前（1310 年～1450 年）のものでした（Haas et.al, 2018）。



図 12. タンブナ・リアエ(SI2015-04)



図 13. タンブナ・リアエ(SI2015-04)：ここで土器が発見された。



図 14. 土器の破片：タンブナ・リアエ(SI2015-04)

おわりに

新発見の 4 遺跡について、考古学予備調査をおこない、初めて放射性炭素年代測定を実施しました。島民が保護・保存すべきシンボ島の歴史、その理解のための重要な知見をこの調査は提供してくれました。3カ所の先史遺跡で発見された土器や貝殻の破片は、人類がラピタ後の時期に早くもこの島に定住していた証拠となります。今のところ、最も古い遺跡はヌサシンボ島にある先史遺跡の洞窟（SI2015-02）で、1560年から1820年前です。次に古いのは同じくヌサシンボ島にある1000年から1240前の岩窟住居（SI2015-03）でした。オーヴ火山にある聖所遺跡は、560年から700年前のものでした。先史遺跡や歴史遺跡の調査結果から、ヨーロッパの交易商が1844年に入植し1900年代まで定住するよりも以前に、初期の入植者が最初にソロモン諸島に定住していたことがわかります。考古発掘調査がすすめば、シンボ島の入植者およびその生活環境の詳しい歴史について、さらに多くを学び理解を深めることになるでしょう。

謝辞

今回の考古学調査を成功に導いてくださった以下の方々に感謝の意を捧げます。サンディエゴ州立大学考古学・人類学部の研究チーム、マシュー・ラウアー教授(人類学)とトッド・ブラジェ教授(考古学)および大学院生のチェルシー・ハンターとハンナ・ハース。彼らは考古学調査の結果を提供して下さいました。そして土地所有者とシンボ島の地元情報提供者、シンボ島族長委員会、シンボ島地域社会とその指導者の方々。さらに以下の方々にも感謝申し上げます。野外調査のアシスタントを務めた地元のニクソン・シオン、シメオン・マラ・キャシー。西部州政府、教育・人材省、文化・観光省、ソロモン諸島国立博物館(ローレンス・キコ代表)などは、私どもの考古学野外調査を許可し支援を下さいました。

参考文献

Haas, H., Braje, T., Lauer, M., Fitzpatrick, S., Kiko, L. and Ale'eke, G. (2018) "Archaeological Reconnaissance and the First Radiocarbon Dates From Simbo Island, Western Province, Solomon Islands", *Journal of Pacific Archaeology*, 9(1), pp. 63-69.

Available at website: <https://www.pacificarchaeology.org/index.php/journal/article/view/222>

写真提供

Hannah. Haas

トンガ



トンガ国立博物館の再生：トンガ王国における文化遺産保護の試み

ミリカ・ポマナ プログラム上級担当官補佐
文化観光省

はじめに

トンガ国立博物館再生事業は、トンガ王国文化観光省文化遺産局が担当する 3 件の主要文化遺産保護／保存事業の 1 つです。すでに進行中の事業は、(1) 地域密着型の無形文化遺産目録作成事業 (2) 古代王族墳墓「オツ・ランギ・オブ・ラパハ」のユネスコ世界遺産への推薦に関連する文化遺産保護事業です。そして第 3 番目が、トンガ国立博物館再生事業です。

初期のトンガ国立博物館

トンガ国立博物館は、トンガタプ本島(地図参照)のトフォア(首都ヌクアロアの郊外)にあるトンガ国立文化センターの展示ホールに 1988 年に開館しました。文化センターは日本政府からの補助金で建設され、タウファアハウ・ツポウ 4 世国王が 1988 年 4 月に開館を宣言しました。

博物館の本館展示室には、現王族と代々の王族の絵画や写真、それに王室関連の工芸品などを主に収蔵・展示していました。当時の展示品のほとんどは、王室(トゥポウ王朝)が所有していました。当時、国立文化センターは、観光を担当する労働・商務省の管轄下にあります。



写真 1. 1988 年完成時のトンガ国立文化センターの鳥瞰図

(出典：観光省文化・遺産部)

2000 年に、文化センターに隣接する収蔵建物に、主展示室が開設されました。そこには、多様な収蔵品の中から選ばれたトンガ文化の偉大な遺物が展示されています。この展示は、多数の高名な伝統的知識保持者や実践者からの援助を得て、ピロレヴ・ツイタ王女が後援し、エイドリアン・ケプラー氏が館長を務めました。

2006 年に、国立文化センターは民営化され、建物を引き継いだ団体は博物館を閉館し、学校を開校しました。



写真2. 1988年トンガ国立文化センターの展示ホール（出典：観光省文化・遺産部）

現在のトンガ国立文化センターとトンガ国立博物館

その後、2015年に国立文化センターは政府に返還され、当時内務省に属していた文化遺産局が、建物の管理を引き継ぎました。文化遺産局の計画の1つは、国立博物館の再生と開館でした。しかし、この計画は、カテゴリー4の熱帯性低気圧サイクロン「ギタ」によって国土が壊滅的被害を受けたために延期されました。サイクロンで議会建物が崩壊し、国立文化センターの建物群が議場として使用されたためです。

大規模な自然災害は、再生事業の大きな障害となりましたが、近い将来に博物館を再開するという作業計画は今も進行中です。トンガ国立文化センターの敷地内ではありませんが、今のところ博物館の場所は決定しています。数は少ないですが文化遺産局所蔵の遺物の記録作成を継続しつつ、他の文化遺産保持者との連携を強めてきました。

今後に向けて

私は、博物館再生事業の唯一の担当職員ですので、多くの文化関係者から支援をいただく必要があります。私は野外研修に継続的に参加しなければなりませんし、資金面に限らず、専門知識を持った人材支援や博物館業務に関する資材や道具について、協力団体からの支援も求めています。



出典：<https://www.eua-island-tonga.com/Tongatapu.html>

アクセス日時 2019 年 8 月 30 日 (金)

参考文献

以下は、トンガ王国の文化保存の進展に関連した新しい論文へのリンクです。

<http://www.looptonga.com/tonga-news/fiji-hosts-tonga-national-museum-specialists-68336> South-south Exchange with Fiji Museum, 2017

<http://ats.abris-a.com/nz2003/pic/nz038876.jpg> TNM at Exhibition Hall, TNCC

<http://www.looptonga.com/content/government-takes-over-management-tonga-national-cultural-centre>

<http://www.mic.gov.to/news-today/press-releases/4459-preserving-tongas-museums-archives-and-libraries-for-the-future>

<https://www.tripadvisor.co.uk/LocationPhotoDirectLink-g317040-d1604983-i100497291->

[Tonga_National_Cultural_Centre-Tongatapu_Island.html](https://www.tripadvisor.co.uk/LocationPhotoDirectLink-g317040-d1604983-i100497291-Tonga_National_Cultural_Centre-Tongatapu_Island.html)

Kaeppler, Adrienne Lois & Tongan National Museum (1999). *From the stone age to the space age in 200 years: Tongan art and society on the eve of the millennium*. Tongan National Museum, Nuku'alofa, Tonga.

ウズベキスタン



新発見：ダルヴェルジン・テパ遺跡のヒッポカンポス像のある石盤

アクマル・ウルマソフ 主任専門研究員

ウズベキスタン科学アカデミー 芸術学研究所

最近の考古学調査において、ダルヴェルジン・テパ遺跡から見つかった考古遺物の中で、形状と内容が素晴らしい遺物がありました。それはいわゆる化粧盤と呼ばれるもので、空想上の生物であるヒッポカンポス像が刻まれています。ダルヴェルジン・テパ遺跡とその発掘遺物については「第 19 回 ACCU インターナショナル・コレスポンデント」の中で「2015 年から 2016 年のダルヴェルジン・テパ遺跡における新発見 (Ulmasov,2017)」と題した報告がすでに出版されています。したがって、本稿では遺跡の説明や最近の発掘状況については焦点をあてず、化粧盤に刻まれた像の図像学をはじめ近隣の歴史・文化地域との比較分析を中心に報告いたします。



図1 バクトリアの地図：石盤が発掘された遺跡の場所

文献では、この石製品は化粧盤とか化粧用皿と言われています。黒ステアタイト(滑石)で作られており、直径 12cm、厚さ 1~1.5cm の皿状の形をしています(図 2 a)。両面は研磨され、円盤の四分の一は(おそらく意図的に)砕かれていました。縁の部分にも欠損がありました。

表面の平らな外縁部は、二重の小さな「ピラミッド」状の装飾が取り囲んでいました。その列は同心円状の軸で分割されていました。内区の円盤の平らな部分には、珍しい生物の浅浮き彫りが描かれています。それは翼のある馬で、頭部・プロトーム(上半身)・前足からなり、蛇のような丸い胴体と台形状の魚の

尾がついています。馬の頭部は風変わりで、鼻は小さく、耳は大きく長く、目は図式的で頭部に垂直に描かれています。馬のたてがみは密集し、3つに分かれた平らな巻き髪は斜めのひげ飾りで装飾されています。馬の胴体は斜めのひげ飾りでほとんど完全に覆われていますが、所々は消されています。右前足と翼の上半分は損傷しています。この伝説上の多形体生物は、文献などではヒッポカンポスと表記されています。

ギリシア神話では、ヒッポカンポスは魚の尾をもった海馬として描かれています。それは魚類の王様とも言われ、鯨と同等視されています。マーメイドの姿をした海の女神ネレイスがヒッポカンポスに乗っていました。ヒッポカンポス像は特にクシャーナ朝時代の中央アジアに特徴的です。ここでは海蛇もしくは龍馬として表されています。また、同じような龍や混種生物は、クシャーナ朝の支配者が好んだ視覚芸術のモチーフでした(Belentisky, Meshkeris, 1986)。

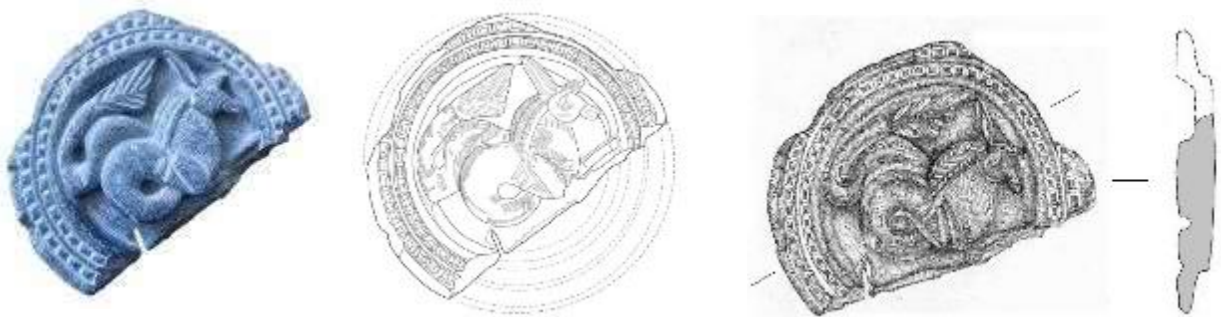


図 2a 2015-16 年のダルヴェルジン・テパ発掘調査で新たに発見された化粧盤

ダルヴェルジン・テパ遺跡での考古発掘調査では、同様のヒッポカンポス像のある遺物が以前に見つかっています。その内のひとつは要塞の南側、防護壁からあまり離れていない場所で発掘されました。そこは陶工らの「マハラ」(多くの家屋がある区画もしくは地域)とよばれる場所です。新たに発見されたものと異なり、この化粧盤は大理石のような石灰岩でできていました(図 2b)。しかし、両者の製作技法は同じで、手回し錐で製作され研磨されていました。ここでは、化粧盤は水平に 2 分割されています。下半分は粉箱として製作されたと推測されます。上半分はヒッポカンポスとその騎乗者で構成されており、概略的におおざっぱに描かれています。スペースがなかったからか工人が限られた平面に描く像の大きさと比率を考慮にいれなかったからでしょう。ヒッポカンポスの頭部と前半分が後半分よりも大きいのが見てとれます。また前足は後足より長いのです。尾は体部から離れ縁に沿って上に曲がっているようです。騎乗している人の姿はおおざっぱに描かれていて、鼻は長く首はほとんどありません。頭部には兜を被っているようです。騎乗者はまるでヒッポカンポスを 2 分割しているように描かれています。遺物の研究者は、近隣のガンダーラ歴史的文化的地域からの出土品と比較して、遺物はバクトリアで製作された紀元初頭のものであるという結論に達しました(Pugachenkova, Rtveladze, 他, 1978)。

ダルヴェルジン・テパ遺跡(特権階級の住居 Dt-5)で発掘されたもうひとつの遺物にもヒッポカンポスが描かれていました(図 2c)。それは長方形の石製印章です。表面は長方形の蝶番模様で装飾され、中央にはヒッポカンポスがざっくりと描かれていました。この遺物は紀元 1 世紀から 2 世紀のもので(Antiquities of southern Uzbekistan, 1991)。



図 2b ダルヴェルジン・テパ遺跡出土の化粧盤



図 2c ダルヴェルジン・テパ遺跡出土の石製印章

類似の遺物：他のバクトリア遺跡（現在のタジキスタン）出土の化粧盤

バクトリアにおいて化粧盤が広く使用されていたことは、タジキスタンの発掘遺物からも確認されています。タジキスタンの一部地域は、かつて同じ歴史・文化地域に含まれていたことを思い出してください。そのひとつはコバディアン溪谷にあるウシュツル-ミューラ記念碑からの出土品です。発掘品は暗緑色の蛇紋石で作られていましたが、ひどく損傷していました。円盤表面の下半分は平らですが、上半分には動物の浅浮彫りが彫刻されていました。構図は草食動物（ブハラ鹿らしい）とそれに襲いかかる捕食動物です（図 3b）。ここでは、「苦しみ」の場面が巧みに作り出されています。頭を回して少しだけ動きのある丸い形の穏やかな鹿と、力強く首を鋭く曲げて歯をむき出し不格好な様子だが足をぴんと伸ばしている捕食動物との対比は、善と悪という2つの原理間の争いの場面を描いています（Litvinsky, 1954）。

1980年代の考古発掘の際に、同様の化粧遺物が、同じオアシスにあるコバディアンの「未知の」村落から発掘されました（図 3a）。それは灰色ステアタイト石で作られており直径は13cmありました。内側にはT字型の横木のようなものが描かれ、円を二分割していました。下部は平坦でしたが、上部は怪物の像であふれています。上半分には、頭がワニで首が馬そして胴体と尾は鱗のある魚という奇妙な生物が描かれていました。円盤の裏は8枚の花びらの円花飾りの彫刻装飾で覆われていました（Litvinsky, Sedov, 1983）。

ダルヴェルジン・テパ遺跡の円盤のひとつは、タジキスタン南部のヤバンで発掘されたものとして知られています（図 3c）。直径9.3cmの円盤が発見された文化層は紀元3世紀から4世紀まで遡ります。この小さな石盤の縁は、環状に配置された三角形の彫刻で装飾されていました。表面にはヒッポカンポスが騎乗者を乗せて右側へ疾走する姿が浅浮彫りで描かれています。ヒッポカンポスの前部は手綱をつけた馬で足は跳躍で長く伸ばされています。後部は丸く巻き付けた尾が上に上がっています。あごひげを生やした大頭の騎乗者は手に手綱をもち、足はつま先を下げた状態ですが、あぶみはありません。研究者によれば、龍馬の像は中央アジアの古代人による神話的礼拝と関係があり、バクトリア地域でよく見られるそうです（Yurkevich, 1965）。



図 3 a, b, c タジキスタン出土の類似遺物

類似の遺物：ガンダーラ出土の化粧盤

ギリシア神話におけるこの種の象徴的イメージは、ガンダーラの歴史文化地域においてはよく知られており広く行き渡っていました (Marchall, 1951)。例えば、シルカプ (タキシラ) 出土のガンダーラ遺物のひとつに、灰色の粘板岩で作られた化粧盤があります (4 a, b, c)。ヒッポカンポスとその上に乗る女性像の浅浮彫りがのびのびと彫刻されています (Alexander Der Grosse et al, 2010)。シルカプの化粧箱に女性像が描かれている点で、ダルヴェルジン・テパのものとは異なっています。研究者らは、多数の化粧盤の視覚モチーフを、ギリシア美術や神秘的主題と関連づけました (Pugachenkova, 1982)。それらのモチーフが深く浸透していたガンダーラでは、ヘレニズムの伝統は物語として繰り返されることはありませんでした。そのひとつが、トリトン (海神ポセイドンの息子) が蓮花で装飾された玉座にすわっている姿であり、またケトス (海の怪物) がマカラ (ヒンズー文化における海の生物) または環形動物にまたがっている姿です (Gandhara and Silk Road Arts, 2000)。

この問題について最も高名な研究者である H. フランクホルトは、ガンダーラ化粧盤の系統的分類を考案し、それらを3つのグループに分けました。彼によれば、神話的テーマ、祝祭の場面、独自の神話上の人物など純粋に古典的テーマを表現するものは第1の「ヘレニズム」グループに属します。最も一般的なのは馬や海の生物を特徴とするネレイス (海の精) の描かれた円盤です。第2グループは「パルティア」です。そのうちネレイスと共に描かれた像だけが歪んでいました。ガンダーラ地域へのインド-パルティア人の侵入が、図像学的にも様式の面でも変化をもたらしたのです。フランクホルトは、男女の人物が描かれていた円盤は単純であると考え、第3の「インド-パルティア」グループに入れました。彼によれば、ガンダーラの化粧箱の出現には、ヘレニズム的伝統が影響していたのです。そうであれば、ガンダーラの化粧箱はクシャーナ朝時代ではなく、紀元前1世紀から2世紀に属します。注目すべきは、この時代にガンダーラの他の離れた地域、特にジュカー (シンド州) とタジキスタンでも同じ円盤が発見されていることです (Francfort, 1979)。

しかし、クシャーナ美術の研究者ラーモン・ダルは、化粧盤はクシャーナ朝初期にも発見されていると述べています。彼によれば、化粧盤の製作技術はバクトリアのギリシア人がもたらしたのです。しかも、円盤は宝石のついた化粧箱というだけではなく、ディオニソスもしくはギリシアの宗教儀式に関連しているのではないかと示唆しています (Dar, 1979)。



図 4 a, b, c ガンダーラ、タキシラ出土の化粧盤

化粧盤を研究している専門家の意見の中でも、田辺教授の見解は際立っています。田辺教授は、ネレイスの物語、ディオニュソス、祝祭場面などを描いたほとんどすべての化粧盤を、仏教のヘレニズム的伝統に関連づけました。田辺教授によれば化粧箱は仏教徒のものであり、ギリシア・ローマの図像学的辞典にある宝物を、仏教信仰の新しいシンボルとして利用することは、仏教徒の主な目的とみなされていたということです (Tanabe, 2002)。

ルオ・ムジオは化粧盤に描かれた像と製作年代について詳細に調査し、現在にいたるまで化粧盤は化粧品と関係があるとは科学的には証明されてはいないと述べています。彼によれば、化粧盤はある種の神話的および象徴的意味を有し、インド、イラン、スキタイの伝統に関係しているそうです。一般的に研究者は、円盤の大部分は、紀元2世紀前半と後半つまりゴンドフォーとカニシカの治世の間に属すると考えています (Muzio, 2011)。

クラウド・ラバンは、化粧箱の分析に基づいて、ヘレニズム時代からクシャーナ朝時代に中央アジアは、主要な交易路であり「影響をおよぼす」道として、西とガンダーラの十字路であったと推測しています。また彼によれば、ヒッポカンポス像のある化粧箱は、スキタイやインドに支配された集団に属していたということです (Rapin) (図 5a, b, c)。

H. ファルクは次のように述べています。「つまり化粧盤は、ワインや水などの液体を入れる容器です。慈悲の能力を呼び起こし邪悪な力を抑制することを願って、先祖や神々に敬意を表してワインや水を地面に注ぐのです。西洋にも同じような行事があります。生贄を伴う宗教行事、結婚式、埋葬式、アルコール飲料を大いに飲む討論会などではまず献酒がおこなわれます。献酒は葬式でも重要な儀式です。使者に復活の時とさらなる命を与えるのです。本当の献酒のためであろう円盤が見つかり明らかに製作もされたガンダーラの地域は、それほど多くはなくタキシラからスワットへと広がっていました。またバヌのアキラをもう一つの比較的小さな中心としていました。この中心地域の外側で、そのほとんどが輸入された円盤を発見しました。しかし、東と西の珍しい円盤はガンダーラの原型を模倣して地元で作られたものでした。このように数が少ないのは、ガンダーラの人々や思想は長期間にわたって受容されることなく伝播したことを示しています (Falk, 2010)」。



図 5 a, b, c ガンダーラ出土の化粧盤

おわりに

ダルヴェルジン・テパの遺物に目を向けると、出土化粧盤は北バクトリアで製作されたと言えます。そのことは以前の出土品からだけではなく、ランプなど黒ステアタイト石で作られた他の出土品からも確認できます。さらに、新たに発見された化粧盤は、様式的特徴やデザインがガンダーラ出土の物とは異なっています。もし文献において石盤が「ヘレニズム」、「パルティア」、「インド-パルティア」の3グループに分類されるならば、ダルヴェルジン・テパから出土した新旧石盤（おそらくタジキスタン出土）は新たな「バクトリア」グループに含まれると言えるでしょう。製作技法に基づいた新しい様式、ヒッポカンポス図像、ガンダーラ円盤との類似性などは、初期クシャーナ朝に起因しているとも推測できます。


バクトリアでそのような遺物が多数出土したことで、その地域では化粧箱のような品物が広く使用されていたと言えます。ダルヴェルジン・テパのユニークな出土品は、古代の宗教的寛容、都市文化、視覚芸術、手工芸品、貿易、国際関係が発展していた証拠となることは注目されるべきです。それは、ダルヴェルジン・テパがバクトリア最大の政治、社会、文化都市の中心地のひとつであったことを示しています。同時に、考古遺跡から発見されたそのようなユニークな出土品は、国家の古代歴史、文化、美術を解明するための重要な実証資料として役立ちます。

参考文献

1. Antiquities of Southern Uzbekistan. Catalogue of the archaeological collection of Fine Arts Institute. Universiteta Soka. – Tokio, 1990. – P. 267, №82.
2. Alexander Der Grosse und die Öffnung der Welt // Publicationen der Reiss-Engelhorn-Museen. Band 36, 2010.
3. Belenitskiy A.M., Meshkeris V.A. Zmei-drakoni v drevnem iskusstve Sredney Azii // SA. – 1986. – P. 20-21. (in Russian)
4. Dar S.R. Toilet Trays from Gandhara and Beginning of Hellenism in Pakistan // “Journal of Central Asia”. Vol. 2. 1979, №2.
5. Gandhara and Silk Road Arts. The Hirayama Ikuo Collection // Catalogue of the Exhibition. Asahi Shimbun, Tokyo, 2000. P. 44-45, Cat. No 86-87.

6. Falk H. Libation Trays from Gandhara // Bulletin of the Asia Institute. New Series. Vol. 24. – Berlin, 2010. – P. 89-113.
7. Francfort H.P. Les palettes du Gandhara. MDFAFA, 23. Paris, 1979.
8. Litvinskiy B.A. Novie materialy po arxeologii Tadjikistana. – KSIIMK. Vol. 55. – Moskva, 1954. – P. 143-144, fig. 57,1. (*in Russian*)
9. Litvinskiy B.A., Sedov A.V. Tepai-Shax. Kultura i svyazi kushanskoy Baktirii. Izd. «Nauka». – Moskva, 1983. – P. 76-79 i 216, tabl. XI/1-3. (*in Russian*)
10. Marchall J. Taxila. An Illustrated account of Archeological Excavations. Cambridge University Press, 1951, vol. II, p. 493; vol. III, pl. 144-146, p. 193-194.
11. Muzio C.L. Gandharan Toilet-Trays: Some Reflections on Chronology // Ancient Civilizations from Scythia to Siberia, 2011. No 17, p. 331-340.
12. Pugachenkova G.A. Iskusstvo Gandxarы. “Iskusstvo”. – Moskva, 1982. – P. 36, Ill. 34-35. (*in Russian*)
13. Pugachenkova G.A., Rtveladze E.V, i dr. Dalverzin-tepa kushanskiy gorod na yuge Uzbekistana. – Tashkent, 1978. – P. 139-140, fig. 99. (*in Russian*)
14. Rapin C. The Gandharan toilet trays and the Central Asian roads of commerce. www.claude.rapin.free.fr
15. Turgunov B.A. Mustaqillik yillarida Dalvarzintepa yodgorligida o‘tkazilgan arxeologik izlanishlar to‘g‘risida // Halqaro ilmiy konferensiya materiallari. Samarkand, 2016. 56-57 b. (*in Uzbek*)
16. Ulmasov A. New Discoveries at Dalvarzintepa in 2015-2016 // ACCU Nara International Correspondent. Vol. 19, 2017. – P. 59-63.
17. Yurkevich E.A. Gorodishe Kushanskogo vremeni na territorii Severnoy Baktirii // SA, 1965. №4. – P. 158-167. (*in Russian*)
18. Tanabe K. Greek, Roman and Parthian Influence on the Pre-Kushana Gandharan “Toilet Trays” and Forerunners of Buddhist Paradise (Paramita) // Silk Road Art and Archaeology, 2002. Vol. 8, p. 73-100.

ベトナム

	バム寺院の門の修復工事
	トラン・ティン・ホン・ブック 修復建築士 文化遺産保護管理ホイアンセンター 遺物管理部

I. 背景

カムハー寺院¹とハイビン寺院²からなる複合建築群は、ホイアンを代表する最も重要な建築物の1つであると20世紀初頭に高い評価をうけました。寺院群はホイアンのミン・フォン共同体によって建築されました。歴史資料によれば、当初は1626年にカムフォ村とティンハー村の境界線上に建築されましたが、その後現在の場所に移築され、大規模な再建工事が行われたようです。現在も残っている建物の正面部分は再建当時のものです。再建以前には、それぞれに入口のある別々の聖所からなっていました。移築年代はいまだ不明です。1930年、フランス極東学院は、この寺院群は他に類を見ない建築であり、日本橋と潮州同人会館などホイアンにある他の2件の建造物と並んで、クアンナム省における最も美しい建造物であると位置づけました。地元の人々はバム寺院と呼んでおり、最近の修復工事は1922年に行われました。

フランス植民地時代とベトナム戦争時代に、国内では都市化がすすみ、寺院群は破壊され次第にミン・フォン共同体からも見捨てられ、寺院の門だけが残りました。その後、仏教協会が土地を取得し、文化センターと学校をその敷地に建てました。時間の経過と共に、様々な要因によって建物の劣化がすすみました。現在、その場所は世界遺産「古都ホイアン」の中央地域になっています。

II. 修復前の状態

1970年代はじめ、戦禍を避けるためにホイアン周辺の住民は、この地に避難し寺門の前の土地に家を建てて住みつきました。寺門は次第に家の壁となり、家畜の飼育をはじめ台所、トイレ、排水溝など多くの付帯設備も作られ、寺門に影響を与えました。

さらに、イチジクの木、菩提樹、苔など様々な植物が繁茂し、門の屋根を覆うまでに広がりました。植物の根は壁に深く食い込み、壁がひび割れ屋根は損傷しました。植物繁茂によって高い湿度が保たれ、風雨による強い振動と相まって、寺門の劣化はさらに進みました。調査によれば、これが深刻な損傷の主な原因でした。

2つの中央入口にある陰陽屋根は完全に破壊され、木枠部分のほとんどが腐り、潰れてしまった部材もありました。陰陽瓦も湿気を含み、苔むし、粘着材もなくなりずれていました。装飾模様も剥がれ、かなり

¹ カムハー寺院は、中国の薬の神様、保全大帝と36将の天霊を祀っています。

² ハイビン寺院は、天后聖母と助産師12神（新生児の出産を助け基本的な教育を与える役目を担う）を祀っています。

色あせていました。ある部分は日常の活動のために使われ、細かな部材の多くは、剥がれ周りに散らばるか、失われていました。

III. バム寺院の門の修復工事

文化遺産保護管理ホイアンセンターは、2000年から設計コンサルタント会社と協力して図面を作成し、修復・修理のマスタープランの提案を進めてきました。2007年までに、バム寺院修復プロジェクト部門が設置されました。修復プロジェクトは、2009年にクアンナム省人民委員会の認可を受け、敷地整備、門の修復、修景の3項目について、資金が振り分けられました。

- 最初に、政府は立ち退き補償制度を整備し、門の前に作られた住居を移転させました。その後、当局は住民が生活のために作った付帯設備を解体しました。煉瓦などに価値はありませんが、門の部材に影響を与えないように解体には細心の注意を払いました。
- 2015年1月、修復工程における調査・研究・建設工事を容易にするための建物全体をつなぐ作業板を設置するため、足場を組みました。周囲の土地はでこぼこで、門の平面図はジグザグなため、建設を容易にし、どの場所にも行きやすいように、竹製の足場を組むことが推奨されました。建設や調査の作業のために、足場の高さ1.6mごとに木製の床板が設置されました。
- 全修復工事の装飾部材と建築細部を調整し、解体するか否かをマーキングしました。建築細部と本体および装飾部材の写真撮影、実測および刻印などを行いました。
- 枝葉を刈り取り、遺産建築に深く入り込んだ木の幹や根をはがして取り除きました。修復工事において遺産建築の損傷部分への影響を最小にするために、作業はナイフ・のみ・斧・片手鋸などの簡単な道具を用いて手作業で行いました。
- 壁と石積み部のブロック材は破損していたので、食い込んだ木の枝や根を注意深く取り除き、できるだけ原型をとどめるようにして、クリーニング・補強・再取り付けを行い、元の場所に取り付けました。この作業は、原型を保持するために、部材の解体とクリーニングのすぐ後に行われました。補強と取り付け工程では、おもに伝統的石灰モルタルを使用し、煉瓦と屋根瓦に挿入しました。修復済みの石積み部材は、現存する対称部材を参考に注意深く検討を重ねました。比較検討する基準がない部材については、最も相応しい結果を得るために特に注意深く検討しました。
- 石積み部から剥がれ、元には戻らない劣化・薄片化した石灰モルタルを詳細に分析調査しました。木製ハンマーで表面を注意深く叩いて薄片化した場所を調査しました。修理が必要とされる部分についてのみ、薄片化部分を取り除き石灰モルタルで下塗りを施しました。そして、石灰モルタルと石積み部の接着面をできるだけ広くしてしっかりと接着出来るようにしました。
- 屋根の修復：劣化損傷していない木枠と古瓦、特に装飾模様のある屋根瓦などは再利用しました。元の

位置を示す印をつけて、再設置しました。交換用の屋根瓦は市販されていません。特に遺産建築を修復するには、屋根瓦を別注する必要がありました。瓦はタンハ陶器村の経験豊富な熟練職人によって伝統的な技術を使用して手作りされ、木炭で焼成されました。模様のある屋根瓦の製造は複雑で、多くの工程を要します。つまり模様木型の作成、詳細な模様の割り付け、瓦の曲線部の製作、各部の組み立てなどの工程です。

—今回復元する装飾部材は、入念に細心の注意をもって製作されました。さらにオリジナルの細部装飾はすべて保存されました。石造り部分の破損のために取り外したオリジナルの細部装飾には印をつけ、丁寧に保存し後に元の場所に再設置しました。

—陶製部材（特に瓦など）の装飾文様は、類型化し、寸法をそろえ、成形や表面調整の際には丁寧に形成しました。

—最終工程として、仕上げと塗装を施しました。この工程は、修理が終わるとすぐに行われ、もとの色と装飾模様が決定されました。

異なるタイプの石灰モルタルを、胡粉・木炭粉・紙粉・サボテンやバッファローの皮で作った接着剤などと、伝統的工法に従って混合しました。熟練工が、自ら原材料の配合と割合を決定し、特に仕上げ用モルタルには、顔料を混合しました。これは、一般的な白い漆喰の代わりに、仕上げ用色つきモルタル層としても用いられました。このモルタル層は光沢があり、壁の防水にも役立ちました。

門の修復工事が終わると、周囲の景観なども整備しました。例えば、人工池の造成・花鉢の設置・木や植物の植付け・庭や散歩道の造成・照明や公衆トイレの設置などです。2018年11月にすべての修復工事が完了しました。現在、寺院の門は古都ホイアンの観光名所となり、多くの観光客が訪れています。



1. 門の前に家が建てられた。



2. 門は次第に人々の家の壁となった。



3. 木々が育ち、屋根の上にもまで広がった。



4. 門を破壊した木の根



5. 壁から部材が落下した。



6. 部材の大部分が腐食していた。



9. 門の前に建てられていた家屋の解体



10. 門に悪影響を与えていた設備の解体



11. 足場



12. 木製部材の記録



13. はぎ取られた木の幹と根



14. 破損部材はきれいにし、強化処理を施した。



15. 破損部材は補修後、元の場所に再設置された。



16. 煉瓦、屋根瓦、石灰モルタルなどで修復した煉瓦工事部分



17. 薄片化した石灰モルタル壁を取り除いた。



18. 石灰モルタルを塗った壁



19. 修復後の屋根



20. 装飾文様は元の場所に再設置された。



21. 塗り直した装飾の細部



22. 一部陶磁器製の装飾模様部材



23. 屋根瓦製作用の模様木型



24. 屋根瓦の製作



25. 伝統的石灰モルタルを混合する熟練工



26. 現在のバム寺院